

会派視察・研修報告書

会派名 オールたじみ

代表者名 石田浩司

1 日 に ち	令和7年10月9・10日（木・金）
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	栃木県宇都宮市 会場：ライトキューブ宇都宮 第87回全国都市問題会議 主催：全国市長会 公益財団法人 後藤・安田記念東京都市研究所 公益財団法人 日本都市センター 宇都宮市
3 参 加 者	石田浩司 奥村孝宏 成田康弘 黒川昭治
4 調査・研修のテーマ	成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～
5 主な内容	<input type="checkbox"/> 基調講演 ◆人口減少・成熟社会のデザイン 京都大学名誉教授 広井良典 <input type="checkbox"/> 主報告 ◆人口減少社会に対応する都市構造改革 ～100年先も発展できる「ネットワーク型コンパクトシティ」の形成～ 栃木県宇都宮市長 佐藤栄一 <input type="checkbox"/> 一般報告 ◆「縮充」発想による公共施設マネジメント 東洋大学国際 PPP 研究所シニアリサーチパートナー 南 学 ◆都市縮小時代の持続可能なまちづくり ～人がつどい未来に躍動する世界都市・高松～ 香川県高松市長 大西秀人 ◆次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり 早稲田大学理工学術員教授 森本章倫 <input type="checkbox"/> パネルディスカッション ◆成熟社会の都市の形～コンパクトで持続可能なまちづくり～ コーディネーター 内田奈芳美 パネリスト ・(株)みちのり HG 代表取締役グループ CEO 吉田 元 ・まちなか広場研究所主宰 山下裕子 ・北海道室蘭市役所企画財政部長 高橋知規（急遽市長代理） ・鳥取県米子市長 伊木隆司

6 所感、提言事項、課題等

【議員氏名】 石田浩司

全国都市問題会議に参加し、1日目は基調講演・主報告・一般報告が、2日目にはパネルディスカッションが行われました。

主報告では、宇都宮市における複数拠点を公共交通で結ぶ「ネットワーク型コンパクトシティ」について発表がありました。LRT（ライトライン）を都市の“背骨”と位置づけ、バスや地域内交通を組み合わせることで、高齢者や子育て世代も安心して暮らせる街づくりが進められています。再生可能エネルギー（ごみ焼却発電）で運行されるLRTは環境負荷の軽減に寄与するだけでなく、沿線地域の人口・経済の活性化や医療費の削減にもつながっているとの報告がありました。最終的な目標は、経済・福祉・環境が調和する「スーパースマートシティ」の実現であるとされています。

高松市においても、人口減少と都市の低密度化に対応するため、「コンパクト+ネットワーク」型のまちづくりを推進しています。中心市街地への機能集約、公共交通とデジタル技術の連携、地域コミュニティの再生を三本柱とし、市民・民間主導による協働型都市経営を展開しています。行政コストの抑制と生活の質の向上を両立させ、縮小社会においても持続可能な「歩いて暮らせる都市モデル」「ウォークブルなまちづくり」を目指しています。これは単に歩きやすい道路を整備することにとどまらず、歩くことで人と人とが出会い、会話が生まれ、地域の文化や経済が循環していく——そんな“人のつながりをデザインする”ことを理念として掲げています。

多治見市でも、ネットワーク型コンパクトシティの実現に向けた都市計画が進められています。今回の都市問題会議を通じ、新本庁舎を核とし、特に公共交通機関や移動手段の充実を図ることの重要性を改めて実感しました。

「歩くこと」を基本にしたまちづくりは、高齢化社会を迎えるにあたって“健康”を支える重要な要素です。成熟社会において都市に求められるのは、単なる便利さではなく、そこに暮らす人々が「自分らしくいられる場所」、そして「誇りを感じられる空間」をどう創出するかという点です。移動・拠点・コミュニティのあり方を見直し、まち全体を有機的につなげていくことが求められています。

そのためには、駅周辺のにぎわい創出（これが難題ではありますが）を進めることが欠かせません。中京学院大学の誘致を起爆剤として、官民が一体となり、新しいまちづくりを進めていくことの重要性を強く感じました。

【議員氏名】 奥村孝宏

基調講演では、広井良典京都大学名誉教授が、人口は2008年をピークに激減している。人口減少・成熟社会のデザインが重要との趣旨で、幸せはローカルから、無いものねだりではなく地域にあるものを探す「地元学」が大事であるとのお話をされました。

<p>6 所感、提言事項、課題等</p>	<p>特に最近はや若い世代にローカル志向があり、地方都市から東京などの大都市集中の流れとは逆に、地方のもつ固有の価値観や風土的・文化的多様性への関心が高まり、地域への着陸時代が訪れているとのこと。</p> <p>そのためには、こうした方向を支援する政策こそが必要だと思いました。</p> <p>次に、佐藤栄一宇都宮市長が主報告を行いました。佐藤市長は、人口減少社会に対する都市の構造改革として、宇都宮市の取り組みを報告されました。ネットワーク型コンパクトシティは人口減少・少子高齢化に対応するもので、市内の中心部とそれを囲む周辺地域で構成され、日常生活に必要な事柄がそれぞれのエリア内(市街化調整区域内を含む)で完結できるように、行政が政策として取り組んでいるとのことでした。</p> <p>午後の一般報告では、東洋大学の南学先生が、成長社会から成熟期へと移りつつある今、単なる減少・削減ではなく「縮充」が求められ、身近なところでは、ママ友、中高生、リタイア男性の居場所づくりを行う際、小学校に多くの市民利用施設を集約することを提案されました。</p> <p>次に、大西秀人高松市長が人口減少は地方のチャンス「歩いて暮らせるまち」の取り組みを紹介されました。駅直結の大学で多くの学生が集まり賑わいを生んだこと。公共交通のネットワークでは、市民、市役所、事業者、公共交通事業者が協働で取り組み、70歳以上の高齢者には割引制度を導入したこと。また、市内44の地域に「地域コミュニティ協議会」を設立し、地域支援補助金を交付するとともに、支えあいネットワークを立ち上げたとのことでした。</p> <p>次に、森本章倫早稲田大学教授はどうやってコンパクトシティをつくるのか?といった視点からの講演でした。交通手段は、自動車に代わる新たな交通機関として2010年代にはライドシェア、2020年代は自動運転車の普及が加速化する。これらの多様な交通機関の賢い組み合わせで自動運転社会におけるまちづくりを進めていく必要がある。コンパクトシティは郊外を切り捨て中心市街地のために行うものではないのだからとの言葉が印象的でした。本市の試験導入に期待しています。</p> <p>2日目は、内田奈芳美埼玉大学大学院教授がコーディネーターを務め、パネルディスカッションが行われました。</p> <p>公共交通については、昭和30~40年代はバスの利用が多かったが、今や地方では官民連携で社会的利用のある路線は残さないといけなことから、行政がバス事業者に頼んで走ってもらっている。ただ、バス自体も松江市の事例(100円バス)のように低額で乗れることで、ご婦人方におしゃべりのできるバスといって好評な事例もあるとのことでした。</p> <p>また、まちづくりでは中心市街地の一等地に店舗ではなく広場を整</p>
----------------------	---

	<p>備し、市民の居場所を設ける取り組みが行われている事例が発表され、まちなかが、通過するだけの場所から市民が滞留し、お互いを見る場所、見られる場所になり、市民が他者を認知するという効果が報告されました。</p> <p>本市においても、新本庁舎が一等地に建てられ、市民が集う場所になることを期待します。</p>
<p>6 所感、提言事項、課題等</p>	<p>【議員氏名】 成田康弘</p> <p>全国都市問題会議（全国市長会）が、10月9日・10日、餃子はもちろん、カクテル、ジャズの町として有名な「宇都宮市」で開催されました。同市は、一度訪れただけでは堪能できない魅力に満ちています。人口51万人ほどで、かつては、江戸と奥州を結ぶ「奥州街道」、日光に繋がる「日光街道」が交差する宿場町として栄えました。現在でも、東北新幹線、東北本線、北関東自動車道、東北自動車などが集中しており、関東北部の中心拠点です。交通の便利さから、昔も今も商業・行政の中心として栄え、地域の経済を牽引してきました。つまり、宇都宮の発展の原点は、「交通」にあると言えます。</p> <p>昭和後期から自動車社会が進むと、市街地は郊外化、人口は分散し中心市街地の空洞化が進みました。市民の移動は「車頼み」となり、渋滞の慢性化が常態化となります。高齢者・学生・交通弱者の移動困難といった問題が顕在化しました。この結果、「車に頼らない都市構造」への転換が求められるようになりました。</p> <p>宇都宮市は、「ネットワーク型コンパクトシティ(NCC)」の実現を掲げており、都市をコンパクトにまとめながら、公共交通で結ぶ都市構造を目指します。そこに必要となるLRT(ライトライン)は、階層的な公共交通ネットワークの基軸となっています。LRTは、単なる交通インフラでなく、①環境にやさしい電気走行(CO2削減) ②歩行者中心のまちづくり ③企業誘致・紅葉創出・観光動線の再生といった波及効果を見込む「まちづくりの核」の三位一体の再生策を掲げ、持続可能なまちづくりを進めています。</p> <p>以上が、「主報告」の佐藤宇都宮市長の報告内容です。</p> <p>「一般報告」では、大西高松市長の30年以上にわたる地域の努力と官民の協働により「まちを再生に向かわせた」内容が印象的でありました。かつて、高松市の中心市街地「丸亀町」は、四国最大の繁華街として栄えていたが、郊外への大型商業施設の進出と人口減少により、空き店舗が急増し、通行が半減。そこから始まった「危機感」が住民・商店主・行政が一体となる再生の原動力になります。再生の中心には、「歩いて楽しい空間づくり」があり、アーケードをリニューアルし、石畳の美しい舗装や街路樹・ベンチなどを整え、市民が集い、“居心地の良いまち”が実現し、来街者が増え、商業・文化・観光が好循環となりました。</p> <p>さらに、商店街の空き店舗率は、20%程度が5%になり、地価上昇</p>

も全国上位、昼夜を問わず人が集まる街に変貌しました。

丸亀町の成功は、単なる「建物の再開発」ではなく、「地域主体のまち経営」への転換にあると思います。行政主導ではなく、市民と事業者が責任を持って街を運営する仕組みを築いたと言っても過言ではありません。最後に、市長が「コンパクトシティと公共交通はセットで」と言われ、多治見市の抱える問題に対する一つの答えだと強く感じました。

本市においても、最終的に目指すべきは、「陶都の文化と人のにぎわいが融合する中心地市街地」の創出が鍵になると考えます。また、陶器やタイルなど地場産業の素材を活かした景観整備によって、“多治見らしさ”を体感できる回遊性の高い街並みを目指すべきです。公共交通整備（LRT的思想）と連携した交通・商業・文化・居住をバランスよく組み合わせた“歩いて暮らせる楽しいまち”こそ、多治見の次なる都市像と言えます。

【議員氏名】黒川昭治

人口減少・高齢化が進展する中で、持続可能な都市経営の方向性について議論が行われた。

主な内容

基調講演で、人口減少を前提とした社会デザインの必要性を説き、福祉・環境・経済を統合する持続可能な都市像を提示。

主報告は、宇都宮市長が宇都宮市の取組事例のLRT（ライトライン：次世代型路面電車）を核とした「ネットワーク型コンパクトシティ」の形成を紹介。脱炭素、地域経済循環、デジタル活用を柱とする都市戦略を報告。

一般報告では、公共施設の「縮充」発想（機能集約と質向上）、高松市の商店街再生事例、次世代交通と都市構造改革の必要性などが示された。

これらから、以下のことが学び取れる。

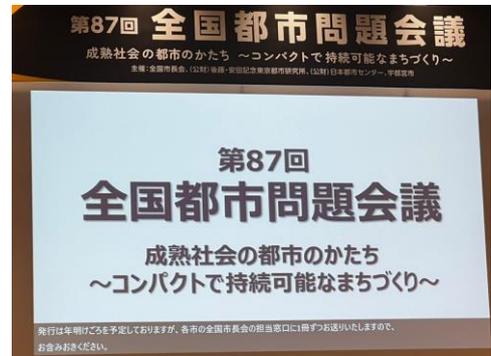
- ・ 人口減少社会における都市政策は、「縮小」ではなく「質的転換」であること。
- ・ 公共交通を軸とした都市構造改革により、歩いて暮らせる都市空間を形成することの重要性。
- ・ 公共施設は単なる削減ではなく、機能集約と質の向上を両立させる「縮充」の考え方が有効。
- ・ 市民参加とデジタル技術の活用が、持続可能な都市経営の鍵となる。

今回の会議を通じ、人口減少・高齢化が進む中でも、都市は再編と質的転換によって持続可能性を確保できることを再認識した。公共交通を軸とした都市構造の見直し、公共施設の再配置と効率的運営、そして市民参加を重視したまちづくりが不可欠である。特に宇都宮市のネットワーク型コンパクトシティの取組は、地方都市における先進的なモデルで

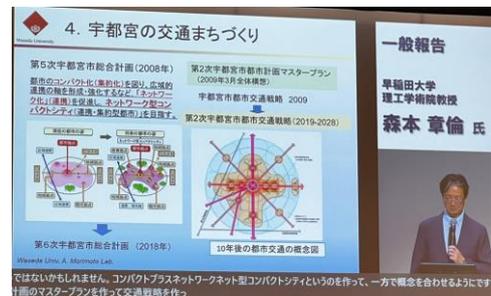
6 所感、提言事項、課題等

あり、当市においても参考となるもの。

人口減少社会における都市政策は、「縮小」ではなく「質的転換」であることを強く実感した。「歩いて暮らせるまち」「公共交通の再編」「市民参加の仕組み」を重点に、スピード感を持って取り組む必要があると考える。



7 写 真 等
※視察の場合は必須、研
修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。